59

防長の医家四熊家および浅山家の旧蔵書資料について

中澤　　淳[1)]，亀田　一邦[2)]

[1)]山口大学，[2)]九州国際大学

山口大学医学部図書館には，山口県立医科大学の時代に地元医家から寄贈された古医書が収蔵されている．その一つは周防富田の四熊家旧蔵書であり，今一つは長門大嶺の浅山家旧蔵書である．現在それぞれの資料について図書目録を作成中であるが，江戸時代末期から明治初期にかけての防長二州における医学教育に関連することが含まれるのでここに紹介をしたい．

四熊家は徳山藩内富田土井（現周南市土井）に16世紀中頃から続く旧家であるが，6代久左衛門為方から医業が始った．9代久左衛門俊方は宝暦11（1761）年に長崎で阿蘭陀医術を習得し，地元に蘭方も教授する私塾「見学堂」を開校した．その後12代謙方までの4代が50年以上にわたり塾主として教育と経営に携わった．13代直方宗庵（1833-1908）は大坂に遊学して儒学と医学を学び地元に帰り開業し，さらに戊辰戦争では徳山藩医として奥州，函館に従軍した．四熊家蔵書は16代濟夫博士から昭和33（1958）年に山口県立医科大学へ寄贈された．

その蔵書は72点278冊あり，すべて刊本である．中には「見学堂」の時代から代々使われてきたと思われる「素問」「霊枢」「傷寒論」「金匱要略」「難経」などの漢方古典，「萬病回春」「医学入門」などの明代医書，「腹証奇覧」「類聚方集覧」「蕉窓方意解」「薬徴続編」などの古方派・折衷派医書，さらには「重訂解体新書」「医範提綱」「病学通論」「扶氏経験遺訓」などの洋方医学書，また「内科新説」「西医略論」「全体新論」などの幕末の英医合信（ホブソン）の翻訳書もある．

浅山家は長府藩家老職椙森家の老臣であったが正徳，享保の頃（18世紀初め）故あって主家とともに藩を退き，浅山道琢が萩藩内大嶺（現美祢市大嶺町）において医業をはじめた．その後長府藩，清末藩の医官とも親密な交流を保ちながら医家をつなぎ，6代宗瑞は幕末に攘夷戦争のとき下関に設置された奇兵隊病院に勤めた．また7代良輔（1845-1900）は明治新政府のもと山口県が明治5（1853）年に開設した赤間関医学校において医育活動に参画した．浅山家ではその後も医業が続き，昭和39（1964）年9代吾三博士のとき山口県立医科大学へ蔵書が寄贈された．

その蔵書は116点427冊あり，54点111冊が写本，他はすべて刊本である．漢方古典や金元明の医学書は四熊家蔵書とほぼ同様であるが，「子玄子産論」「観聚方」「脉学輯要」「古方翼」「温故秘録」「療治茶談」などの解説書，「治痘略明鑑」「瘍科方筌」「正骨範」などの新情報の筆写本が見受けられる．さらに明治初期の医学教育における教科書として，「講筵筆記」「生理発蒙」「原病学通論」「病学通論」「尼氏医鑑」「内科簡明」「理礼氏薬物学」などの英独蘭米医学書の訳本，また「化学入門」「化学新書」「登高自卑」「気海観瀾広義」などの基礎科学の訳書もある．

防長二州においては，長崎との距離や交通の要衝下関の存在が西洋医学の受け入れを促進したと考えられる．また「長崎聞役」の配置や漂着外国人長崎送りに際しての医家同行などは長崎からの海外最新情報収集を助けた．毛利藩には，萩本藩と長府藩，清末藩，徳山藩，岩国藩（幕末までは岩国領）の4支藩が存在したが，医学教育についてはそれぞれ独自の展開をみせた．四熊見学堂に加えて，天保年間に萩本藩に開設された漢方と蘭方の優秀な教授陣による医学教育機関・好生館（堂），明治初期の赤間関（下関）と三田尻（防府）における医学校開設並びに独自の医術試験（壬申考試）実施など，防長二州の医学教育にはユニークなものがあるが，四熊家と浅山家はその一翼を担っていたわけで，これらの蔵書解析は極めて有意義であると期待される．